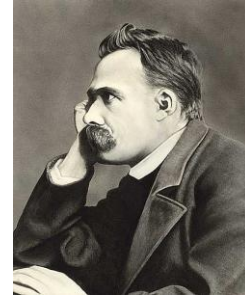


## 第一回読書会

## ツアラトウストラはかく語りき

～だれでも読めるが、だれにも読めない書物～

- |                   |
|-------------------|
| I. はじめに           |
| II. ニーチェについて      |
| III. あらすじ         |
| IV. 「超人」と「永遠回帰」   |
| V. 現代日本にとってニーチェとは |
| VI. 参考文献          |

I. はじめに

狂気の人—君たちはあの狂気の人のことを聞かなかったか。—真昼間、提灯をつけて、広場に出てきて、ひっきりなしに「俺は神を探している！俺は神を探している！」と叫んだ人のことを。—広場にはちょうど神を信じない人たちが大勢集まっていたので、彼はたちまちひどい物笑いの種になった。神様が行方不明になったのか、と或る者は言った。神様が子どものように迷子になったのか、と他の者は言った。それとも隠れん坊をしているのか？我々が怖いのか？船に乗ったのか？移民というわけか？—彼等はロクに叫び笑った。狂気の人には彼等の中に飛びこみ、鋭い目つきで睨みつけた。「神が何処へ行ったかって？」と彼は叫んだ、「お前たちに言ってやろう。我々が神を殺したのだ—お前たちと俺が！我々はみんな神の殺害者だ。だが、どうしてそんなことができたのだ？地球を太陽から切り離すようなことをどうしてやってしまったのか？我々はどっちへ動いているのか？我々は無限の虚無の中をさ迷って行くのではないか？寒くなってきたのではないか？絶えず夜が、ますます暗い夜がやって来るのではないか？真昼間から提灯をつけなければならないのではないか？神を埋葬する墓掘り人たちの騒ぎは未だ聞こえてこないか？神の腐る匂いが未だしてこないか？—神は死んだ。神は死んだままだ。そして我々が神を殺したのだ。世界がこれまで持った、最も神聖な、最も強力な存在、それが我々のナイフによって血を流したのだ。この所業は、我々には偉大過ぎはしないか？こんなことが出来るためには、我々自身が神々にならなければならないのではないか？」—ここで狂気の人には口をつぐみ、改めて聴衆の顔を見た。聴衆もまた押し黙って、訝しげに彼を見つめた。ついに彼は、提灯を地面に投げつけた。提灯は壊れて消えた。「俺は早く来すぎた」と彼は言った。

ツアラトウストラの冒頭で有名な一文「神は死んだ」が登場する。だがこの言葉はツアラトウストラの前年に書かれた「悦ばしき知」で初めて登場する。ニーチェの根本思想に深く根付くこの言葉の意味は何か。これは、キリスト教的価値観の崩壊を意味する。ニーチェはキリスト教が人々に「誠実さ(=真実を語れ)」を育て上げた為、その「誠実さ」が神に向かって行った時、神自身が人間によって作られたものであることがわかってしまったと考えていた。そしてこの「誠実さ」は「科学的思考」や「批判」を生み出しキリスト教を否定するに至った、ということである。キリスト教的価値観は当時、欧州の最高価値に君臨していたが、これが否定されたことで、人々は自らの人生の目標を喪失したのである。このような状態をニーチェは「ニヒリズム」と呼んだ。

現代日本は、まさにこの「ニヒリズム」が充満した時代だと私は考えている。高度経済成長期には豊かさや自由を求め、バブル期には生活を楽しむことに最高の価値が置かれていた。しかし今、日本にはそのような価値観は存在しない。不況も相まって政治的・経済的な危機感だけが世の中を跋扈しており、とてもその目標は存在していない。つまり、現代日本は「ニヒリズム」に陥ったのである。では、ニーチェは「ニヒリズム」を打破するにはどうすべきだと考えたのか？

今回の読書会では、現代日本にもあてはまる「ニヒリズム」にどう対処すべきなのか、それを語る魅力的で誘惑を隠さない恐ろしく甘美で危険な「ツアラトウストラ」をテーマとして掲げる。

## Ⅱ. ニーチェについて

まず読書会のテーマである『ツァラトゥストラはかく語りき』の著者ニーチェについて簡単に紹介する。1844年に生まれ1900年に没するが、その生涯は決して良いものではない。生涯を簡単にまとめるならば「若くして成功に恵まれるが、人生半ばからは挫折と苦悩を抱えて執筆し、最後は精神を病んで死ぬ」となる。幼少時は作曲家への道を歩むが、ライプツヒ大学に入学するとリツチュル教授の下で古典文献学(古代ギリシア・ローマの古典を研究する学問)を学び、教授の紹介で24歳の若さでバーゼル大学の教授になる。しかし、以後ショーペンハウアーに夢中になったり、ワーグナーと親交を深めるなどしながら、『悲劇の誕生』を刊行すると、当時の古典文献学の学界から見放されるようになった。だが、親交の深いワーグナーとも考えの違いで絶交し、学界では認められず、次第に精神まで病むようになる。その後、スイスのジルス・マリアという街でしばらく過ごす間、突然「永遠回帰」の思想がインスピレーションとして到来し、しばらくした後に『ツァラトゥストラ』を執筆し、その後それを補足解説する『善悪の彼岸』『道徳の系譜学』などを執筆していく。しかし、執筆量と裏腹に精神状態は更に悪化した。皮肉な事に死ぬ直前になるとニーチェの名声が少しずつ高まっていくが、本人は理解も出来ぬまま没した。

## Ⅲ. あらすじ

ツァラトゥストラは、近代において書かれた哲学書としては独特な文体で描かれている。それは、哲学書というよりも、小説や神話の様な「物語」文体であるためである。これは、ニーチェは哲学書として論理展開を行い読者に一貫性のある理解を求めているのではなく、あえて「物語」文体にして哲学を議論し解釈することを求めた為であると言われている。そのため、主人公のツァラトゥストラ以外は固有名詞は本書で登場しない。ニーチェは本書でニヒリズムの到来を描いているが、本書がそれに置き換わる新たな価値観を提供するものではなく、各人に、人間は超人となる為はどう生きるべきかを思考して欲しかったのである。

本書の内容は、物語の流れとしてのあらすじは大まかに説明することが可能であるが、細かい内容を説明することは不可能だけでなく、ニーチェが嫌った新たな価値観の固定化を生み出しかねない為、ここではごく簡単に説明を行う。

主人公であるツァラトゥストラは10年もの間山に籠っていたが、神が死んだことを知り絶対者がいなくなった世界で超人を教えようとする為、山を下りて人々がいる街へと行く。ツァラトゥストラは街で超人の説明をするが理解されず、街を出て理解する弟子を探し求める。しかし、結局は「自分の人生は自分で見つけるべき」と説いて弟子を棄て、山に帰郷する。山の中では、何人かの特別な人々と出会い交流する。しかし、最後には再び山を降りてしまうのである。

## Ⅳ. 「超人」と「永遠回帰」

ニーチェの思想には様々あるが、本書で描かれている最大のテーマはこの「超人」と「永遠回帰」である。これらを理解するにはニーチェの生涯の思想を理解しなければならない為、本書だけで理解することは難しい。そこで、以下に簡単に本書を理解するに必要なワードを解説し、その上でそれぞれの概念の説明を行う。

### ① 超人

・ルサンチマン…「無力からする意志の歯ぎしり(『道徳の系譜学』)」「ねたみ」「うらみ」。幸福や裕福な者に対して抱くマイナスの感情。ニーチェは、この感情を抱えていると自分自身を腐らせ受け身の姿勢となる為、この感情を克服すべきと説く。

・キリスト教…ニーチェはルサンチマンがキリスト教を生んだと考えていた。キリスト教が生まれた当時、ユダヤ人はローマ帝国の支配下にあり、一般民衆は鬱屈した感情を抱えていたが、武力等で抵抗・反抗することは出来ない為、「神」という概念を持ち出し、この観念の中で自らを弱者から強者へと転換させたと定義している。ニーチェはルサンチマンから価値観が定義された世界では創造性を持たないと批判した。このルサンチマン批判は、キリスト教批判であり、ヨーロッパの文化総体への批判へと繋がる。

・貴族的価値評価法…自分の力が自発的に発揮される時に感じる自己肯定。

・僧侶的価値評価法…自分で自己肯定するのではなく、強い他者を否定しての自己肯定。即ち、あくまで神から見て正しいか否かという自分がそこに存在しない価値評価法。ニーチェはこれを弱者のルサンチマンと定義した。

・ニヒリズム…「至高の諸価値がその価値を剥奪されること。目標が欠けている。「何のために」の答えが欠けている『カへの意志』第一書)」人間にとって最大・重要と考える価値観・価値基準を喪失する状態。

本書でニーチェは、超人を「人間は、動物と超人との間に張り渡された一本の綱(第一部)」と定義している。人間は動物から超人へと向かう間の存在であり、人間は人間を超え超人とならなければならないと説いているのである。その為には、たとえ超人になれなくとも、後世の人間が超人になれるように、死ななければならないとし、「超人の為に没落せよ(第一・二部)」と言う。キリスト教的価値観は、人々の思考を「僧侶的価値評価法」にさせ、所詮、無難な善人しか生み出さないと批判したのである。神が決めた掟の中で人間は自由に行動することは出来ず、創造的な試行や実験は禁止され心清く生きることを目的としたキリスト教は、人間が本来持つ創造性を抑圧してしまうと考えたのである。つまり、ニーチェは「人間は固定的な善や真理を守って生きるのではなく、自ら創造性を発揮して生きなければならない」と考えていたのである。

ツァラトストラでは、ニヒリズムを打破すべく打ち出した思想が「超人」である。超人とは、私なりの言葉でいえば、「神に代わる人類の新たな目標」である(ニーチェは「超人」の解釈が固定化されるのを恐れた為であるか、本書で「超人」とは何かという説明は一切無いので、私なりの解釈で説明する)。現代もそうであるが、人間はニヒリズムやペシミズムが充満した世界では、憧れや希望を持たず、安全で無難な道を歩もうとする。ニーチェはこのような人間を「末人」「最後の人間」と定義し、これらの人間は「憧れを持たず、安楽を第一」とするため、最も軽蔑した。本書で、このような人間に対する侮蔑は何度も出てきている。

超人について、精神が超人へと変化するプロセスについて本書で説明されているので、簡単にまとめる。第一段階は「ラクダ」で自ら重い荷物を進んで担い、そうすることで自分の強さを喜びたい。つまり、困難であればあるほど闘志を燃やし自分を高めようとする精神である。第二段階は「獅子」で、「我意志する」として荒涼とした砂漠の中で「汝なすべし」の鱗で覆われている竜と闘う。これは、既存の価値観である竜と闘い打ち破り、自分はこうすると宣言することである。最後の第三段階は「幼子」で、幼子は無垢に「一つの聖なる肯定」「一つの創造の遊戯」を行う。即ち、幼子はもはや否定するまでも無く、自分から溢れ出る想像力に身を委ねているのである。武道で言えば「守破離」に似ている部分もあるかと思われる。

## ② 永遠回帰

「もしある日またはある夜、デーモンが貴方の最も寂しい孤独の中にまで忍び寄り、こういったらどうだろうか。『おまえは、お前が現に生き、これまで生きてきたこの人生をもう一度、さらに無限に繰り返して生きねばならないだろう。そこには何一つ新しいものは無く、あらゆる苦痛と快楽、あらゆる思念と溜息、お前の人生のありとあらゆるものが細大漏らさず、しかもそのままの順序で戻ってくる。この蜘蛛も、木々の間から洩れる月光も、そして今の瞬間も、この俺自身も』(中略)この思想があなたを支配するとしたら、それはこれまでのあなたを変貌させ、ひょっとしたら打ち砕くかもしれない。何事につけても、『おまえはこのことをもう一度、さらに無限に繰り返して欲するか』という問いが、最大の重しとなって貴方の行動の上のしかかるだろう！あるいは、この最終的な永遠の確認と封印より以上に何物も欲しない為には、どれほどあなたは自分自身と人生とを愛さねばならないだろうか？」(『悦ばしき知』「最大の重し」)

永遠回帰の思想は本書最大のテーマであると言われる。しかし、このテーマが最初に登場するのは、本書と同年に刊行された『悦ばしき知』である。ただ本書最大のテーマであるので、ニーチェが定義した永遠回帰を以上に載せた。「永遠回帰」の思想は、人々を「打ち砕く」、即ち良いことも悪いことも全て繰り返すことから、人々をニヒリズムへと追いやる。ニーチェはこの「永遠回帰」を受け入れられるか否かが、人間を「強者」と「弱者」に分ける要と考え、その「強者」こそが「超人」に成り得ると考えていた。この「永遠回帰」は現実に関わり得るということを目指したいのではなく、自分の人生を肯定する為の思想であるというのが私の解釈である。「神は死んだ」世界から、「自分で自分自身の人生を肯定する」世界への価値転換、それは非常に厳しいものであるが、「超人」になるために避けて通れない道であると考えたのである。

「永遠回帰」の解釈には今まで大きく分けて 2 つの考え方が存在している。一つは、ドイツ哲学者ゲオルク・ジンメルが提唱した「何を行為するにしてもそれを無限に繰り返して欲するか」というのを「命題」として理解するものである。もう一つはツァラトストラに繰

り返し描かれる「人生の中で一度でも本当に素晴らしいことがあって、心から生きていてよかったと思えるならば、もろもろの苦悩も引き連れてこの人生を何度も繰り返すことを欲し得るだろう」というものである。

この「永遠回帰」の思想が訴えるものは、「ルサンチマン」の克服である。「ルサンチマン」を克服する為に、何事も「欲した、意欲した」と考えることが重要であると説いているのである。人生には苦しいこと、辛いことも多いが、これらのことを有益と認め、愛そうとすることを、ニーチェは「運命愛」と呼んだ。つまり、人生のマイナス面も人生全体で見れば有益であることもあるため、ルサンチマンに陥るよりも積極的に愛すべきだということである。

## V. 現代日本にとってニーチェとは

今、日本がニヒリズムに陥っていることは、恐らく多くの人を感じていることであると思う。それは、最高の価値観が失われた、例えば高度経済成長期の「追いつけ追い越せ」やマルクス主義・社会主義の崩壊、民主主義の危うさや資本主義の脆さへの不信感によるものである。

今回、私がニーチェの『ツアラトウストラはかく語りき』を読書会のテーマとして選んだのは、本書が現代日本とニーチェの思想に共通項を見出したからである。それは、極めて簡単に要約すれば「世の中には、これが正しいという真理は無く、正しい生き方も存在はしない。『どう生きるべきか』は他者によって決められるのではなく、自分自身で決めるしかない。どのように生きるかは全て自分が決めるのである」ということである。ニーチェもツアラトウストラも「私は孤独を愛す」と述べていることから、全て一人で実行することが本書では描かれているが、むしろこれから重要なのは「他者と語り合い議論し思考することで自分にとって本当の最高の価値観を創造する」ことであると個人的には考えている。

明治大学雄辯部には幸い、このような場が提供されている。今回の読書会でどう皆さんが考えるかはともかくとして、ニヒリズムの中で、そして個人主義が進行する現代で、明大雄辯部で「自発的」「積極的」に活動して行けば、自分が「どのように生きればいいのか」という人類永遠の課題にも果敢に取り組んでいけると思う。その時、自分の人生を積極的に肯定し、自分の人生は自分で決めようと欲し、永遠回帰が起ころうとも何度でも受け入れられるほど自分の人生に悦びを見出せたならば、きっと「超人」となれるだろう。

ニーチェの思想を単純に見ただけでは、ただ単に一人で頑張ろうとなってしまいが、世の中一人で出来ることは非常に少ない。同志と力を合わせ、議論し、実行することで、自分の人生を謳歌して欲しい。

## VI. 参考文献

- ・ツアラトウストラはこう言った (岩波文庫 青 639-2) [文庫]ニーチェ (著), Friedrich Nietzsche (原著), 氷上 英廣 (翻訳)
- ・ツアラトウストラ(光文社古典新訳文庫) [文庫]フリードリヒ ニーチェ (著), Friedrich Nietzsche (原著), 丘沢 静也 (翻訳)
- ・ニーチェ―ツアラトウストラの謎 (中公新書) [新書]村井 則夫
- ・ニーチェ『ツアラトウストラ』 2011年8月 (100分 de 名著) [ムック]西 研
- ・ニーチェ入門 (ちくま新書) [新書]竹田 青嗣竹田 青嗣 (著)
- ・道徳の系譜 (岩波文庫) [文庫]ニーチェ (著), Friedrich Nietzsche (原著), 木場 深定 (翻訳)